



# 南部アフリカ・アンゴラにおける多言語政策試行： ポルトガル語とパンツェー諸語との間で

寺尾, 智史

---

**(Citation)**

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 32:33\*-66\*

**(Issue Date)**

2009-07

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/81001673>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001673>



# 南部アフリカ・アンゴラにおける 多言語政策試行

——ポルトガル語とバンツール諸語との間で——

寺尾智史

## 1. はじめに

本稿は、アンゴラにおける多言語性を基盤とした言語政策の動向についての予備的考察である。

アンゴラでは、2002年2月、独立翌年以降政権を掌握してきた「アンゴラ解放人民戦線」（以下、MPLA）に対して、長年頑強に抵抗してきた反政府勢力「アンゴラ全面独立国民連合」（以下、UNITA）の議長であり、強力な指導者であったサヴィンビが戦死した。政府に対する武力抵抗の支柱であったサヴィンビ議長を失ったUNITA残党は同年4月、MPLAとの間でルエナ停戦合意に調印し、ついに内戦に終止符が打たれた。2008年9月5日に行われた国会議員選挙（一院制、220議席全改選）では、MPLAが全投票数の81.64パーセントの得票を得て圧勝し、191議席、全議席の87パーセントを手にした。UNITAは16議席にとどまっている。<sup>1</sup> なお、2010年には大統領選挙が予定されている。

一方、近年、アンゴラ沖では海底油田の開発が進み、これを原資とした経済発展も緒についている。このほか、鉄鉱石（アンゴラ南西部）、内戦泥沼化の一因となったダイヤモンド（北東部）などの地下資源にも恵まれている。特筆すべきはアンゴラにおける中国のプレゼンスであり、2006年以来、中国の原油輸入国としてアンゴラはサウジアラビアに次ぐ第二位の地位を占めている。その見返りとして中国によるインフラ整備へのてこ入れも盛んになっている。

しかしながら、内戦期だけでも30万人以上の命が失われ、地雷原の残存など

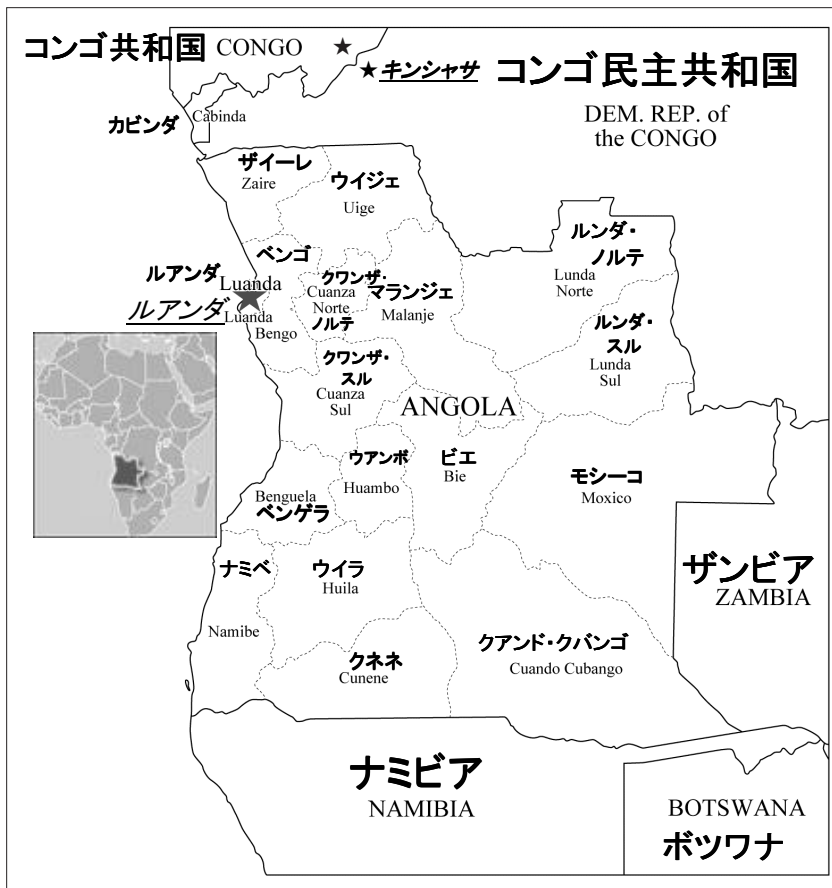
長期にわたる紛争の後遺症も目立つ。また、戦火を逃れて国土人口の約4分の1、約500万人が首都ルアンダ周辺に集中し、ムセケ *musseque* と呼ばれるスラムは拡大する一方である。石油やダイヤモンドなどの地下資源から得られる富の再分配は滞ったままで、社会構造の是正が重い課題となっている。

アンゴラ国内における政治の安定、経済の好転によって、独立以来「建国の理念」として唱えられていた政策実現の機会が訪れている。その中でも、国内の民族（＜部族＞<sup>2</sup>）対立を煽ることで続いてきた内戦の中、長らく手をつけることを出来なかった国民統合に向けた施策が重要視されている。その国民統合理論の組み立ての中で、政府はバンツァー諸語の存在に注視し、リングアス・ナシオナリス *linguas nacionais*（アンゴラ国民言語群、以下「国民言語」とする<sup>3</sup>）としての性格付けを進めている。しかし、これらの言語がなぜ国民統合の枠組みの中で重要とされるに至ったかについて、掘り下げた議論は行われてこなかった。

まず、アンゴラにおける言語が過去どのように扱われたか、その経緯を見ることによって、政府が実施しようとしている言語政策の背景を探る。

## 2. 多言語社会としてのアンゴラ

アンゴラは、南半球、アフリカ大陸南西部に位置する共和国である。西は南大西洋に面す長い海岸線で、北および北東にコンゴ民主共和国（旧ザイル、首都キンシャサ）、南東にザンビア、南にナミビアと接する。また、国土の北側にはザイル（コンゴ）川をはさんでカビンダというアンゴラ領の飛び地が位置し、北はコンゴ共和国（首都ブラザビル）、南および東はコンゴ民主共和国と接する。国土面積は125万6700平方キロであり、南アフリカ共和国（122万1037平方キロ）より大きく、赤道以南のアフリカではコンゴ民主共和国（234万5410平方キロ）に次ぐ2番目の面積を持つ大国といえる。人口は、独立以来国勢調査は行われていないが、世界銀行による2007年年央推計で1695万人となっている。一人当たり国民所得は同じ推計で2540米ドルである。<sup>4</sup> なお、アンゴラ教育省推計による2000年の15歳以上の非識字率は58パーセントに及ぶ。<sup>5</sup>



【図1】アンゴラ位置図および分県図<sup>6</sup>（およその縮尺、緯度/経度は【図2】参照）

アンゴラ国民、そして彼らの間で話されることばについて、その属性を説明することは容易でない。そこに住む人々は、（筆者はこの立場に立たないが）仮に従来の＜人種概念＞から＜分類する＞のであれば、ポルトガル語でネグロ *negro*<sup>7</sup> と呼ばれ、大多数を占める、いわゆる＜黒人＞（以下、必要に応じて＜黒人＞とする）、僅かの数であるが植民地時代入植したポルトガル人を中心とする、ポルトガル語でブランコ *branco* と呼ばれる、いわゆる＜白人＞、そ

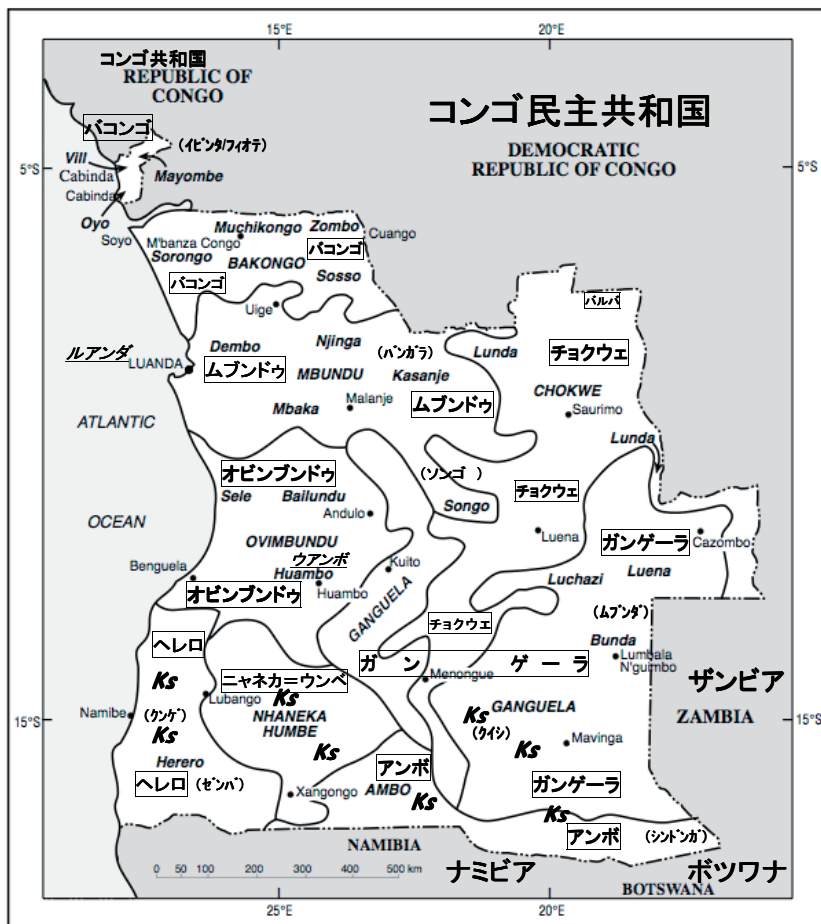
してその両者を祖先に持ち、ポルトガル語でメスティーツ *mestiço* またはムラート *mulato* と呼ばれ、ルアンダなど大都市では一定の人口を占めるいわゆる<混血>からなる。その他少数の印僑（インド人子孫、主にグジャラート商人）、キューバ人とその子孫（独立戦争および内戦時の兵力として投入され、そのまま残った人々）等から成る。

上記のうち、最初に挙げた人々は、主にヨーロッパの言語学者やキリスト教宣教師、人類学者が行った言語分類に準じて分けられた「民族」、ないし（欧米人自身を指し示す場合には用いられない）差別的概念を含むトリーボ *tribo*（英語の *tribe*。従来、日本語では<部族>や<族>に訳されがちであった）に分類されることが多い。このような分類概念をアンゴラでは *grupo etno-linguístico* 「言語民族集団」と呼ぶのが通例である。

ポルトガル統治時代の見解を踏襲する形で、70年代後半の法令では次の9つの集団に分類されている。<sup>8</sup> なお、カタカナの読みはポルトガル語での読みであり、当該「言語民族集団」を構成している人々自身の読み方と異なる場合がある。①キコンゴ *Kikongo*, ②キンブンドゥ *Kimbundu*, ③ウンブンドゥ *Umbundu*, ④ルンダ・コクウェ（チョクウェ） *Lunda Cokwe*, ⑤ンガンゲラ *Nganguela*, ⑥ニヤネカ＝ウンビ *Nyaneka-Humbi*, ⑦エレロ（ヘレロ） *Helelo*, ⑧オシワンボ *Ociwambo*, ⑨コイサン *Khoisan*。

これらの集団名は基本的に言語名と同じ、もしくは、言語名に対応した名称となっているが、上記のように末尾に言及されることの多いコイサンは、従来ボスキマノス *bosquímanos*（英語で *Bushmen*）と呼ばれる人々によって話される言語群（比較言語学のオーダーで諸語、以下、言語として言及する場合は「コイサン諸語」）で、その中に多くのことばが含まれる。<sup>9</sup> その他の集団は後述する「バンツ―諸語」に属する。

①～③、すなわち、キコンゴ、キンブンドゥ、ウンブンドゥに関しては、比較的開発が進み、それとともに言語調査も進展していたアンゴラ北西部に分布するグループであること、内戦を主導した組織が、①～③各グループの違いを強調、煽動することによって存在理由を得ていた経緯から、その分類が確定的



【図2】アンゴラ「言語民族集団」分類地図の一例<sup>10</sup>（決定的なものではなく、未確定の部分多い）Ks = コイサン系住民（点在、一部は移動民）

になっている。

一方、④～⑧については、その分布がアンゴラ南西部沿海の乾燥が進み人口が少ない地域であったり、アンゴラ東部内陸のインフラ整備が立ち遅れた地域であったりするため、言語調査自体があまり進んでおらず、分布域どころか言語名および「言語民族集団」名、さらに言語数も一定しない。このため、「(確定的に)分類されている」のではなく「分類されている場合が多い」という状

況である。

こうしたアンゴラにおける言語と民族の切り分けは、批判的視点が喚起されつつも、基盤としては主に植民地時代のポルトガル人による見解を引き継いだものとなっている。このため、現状を探るには、ポルトガル植民地政策の推移をまず振り返る必要がある。

### 3. ポルトガル植民地政策とアンゴラ

15世紀後半、バルトロメウ＝ディアスが喜望峰に到達する6年前、ヴァスコ＝ダ＝ガマがインド航路を＜発見＞する16年前の1482年、ポルトガル人航海士カン Diogo Cão が現在のコンゴ（ザイール）川下流、アンゴラ北部沿海に到達していたが、アンゴラでの植民活動は、1575年、ポルトガル人パウロ・ディアス・デ・ノヴァイス Paulo Dias de Novais が約700名の入植者とともに現在のアンゴラ沿岸に向かい、翌年ルアンダ Luanda（20世紀初頭までは Loanda と綴られた）を植民都市として整備したことに始まる。ルアンダは、現在に至るまでアンゴラの首都となっている。

アンゴラにやってくる植民者たちには、当初、ブラジル開拓の手法と同じく、カピタニア制に基づくセズマリア（土地分譲）が行われたが、早くも17世紀に入るまでにその試みは放棄された。代わりに、はじめギニア湾内のサントメ島で始められ、その後ブラジルにも導入されたサトウキビプランテーションの奴隷供給地となった。列強が南部アフリカに本格的に進出を始める19世紀後半までの長い間、ポルトガルの実効支配はほぼ海岸地帯だけであった。ポルトガル人は商館（一部は要塞化されていた）を海岸地帯に点在させ、奴隷貿易を柱とした内陸部など後背地との交易の拠点とした。内陸部はポルトガル人が活動をはじめ以前から存在したコンゴ王国などの、いわゆる「＜黒人＞王国」、正確には「バンツー諸語話者集団による王国」群の支配者の統治に任せた。

1665年には、コンゴ王国が侵攻し翌年まで一帯を支配するなど不安定な情勢が続いたが、17世紀末になると、＜黒人＞の間で天然痘がはやり彼らの武力抵抗が衰えたこともあり、内陸王国に対する武力制圧などで現在のアンゴラ北西

部におけるポルトガル人の影響圏は海岸から500キロ内陸にまで至った。しかし、依然として、ポルトガル人たちの活動は植民地経営にはほど遠く、その興味は奴隷獲得に絞られていたといつてよい。このため、「バンツ―諸語話者による王国」群は、その王族、支配者階級をキリスト教化したうえで、ポルトガルの奴隷貿易の歯車に組み込まれた傀儡として温存され、二重統治の構造となっていた。1721年、法律によって奴隷貿易が王室によって独占されることになると、政府の国庫はこれで潤う一方、ポルトガル一般人のアンゴラへの関心はさらに減退した。

このように、アンゴラは、ポルトガル王室のブラジルにおける植民地政策を遂行するうえで徹底的に不足していた労働力の確保を手取り早く行うために、ブラジルとの距離が短く、最も安易な奴隷供給地として機能した。この意味で、アンゴラはブラジルの属領であったともいえる。1765～1769年には年平均約1万4千人ものアンゴラ地域住人が奴隷としてブラジルに移送（「輸出」）された（オリヴェイラ・マルケス：II-160）。<sup>11</sup> なお、1700年～1820年の間にアフリカ大陸全体からブラジルに渡った黒人奴隷は、約200万人と推定されている（オリヴェイラ・マルケス：II-137）。このため、ブラジルの中でもサトウキビプランテーションが活発に開拓されたブラジル北東部ノルデステ地方、とりわけその南部である現在のパイア州周辺のことばには、（現在のアンゴラより北方に当たるギニア湾北部沿海から連れてこられた黒人奴隷たちのことばであった）ヨルバ語と並んで、アンゴラに分布するバンツ―諸語の語彙が残った。音楽、料理や宗教儀礼などにもアフリカ・中南米の両側で共通項が唱えられている事例が存在する。結局、奴隷貿易の影響によって、植民地間、すなわち、ブラジル―アンゴラ間の方がポルトガル本国とアンゴラよりも活発な交易、人的交流とその副産物としての文化接触があったのが実情である。

しかし、中南米への奴隷供給基地としての植民地アンゴラの役割と性格は19世紀前半に根本的な変容を迎える。ブラジルが独立したためである（1822年）。さらに、少なくとも公式には、1836年、ポルトガル政府が奴隷貿易を廃止する。アンゴラは、ブラジル独立が独立することによって、少なくとも面積ではポル



トガル王室最大の海外植民地となった。実際、その農業生産力や豊富な資源からポルトガル植民地政策の中心的位置を占めることとなる。

ところが、それまでポルトガル王室はアンゴラでは本格的な植民地経営を行ってこなかったどころか、ポルトガル王室自体が財政上ブラジルに依存していたなか、開発の基盤となるインフラを整える財力、人的資源に乏しく、結局アンゴラは経済発展から取り残されることになった。このことは、植民地アンゴラにおける19世紀の〈白人〉、〈混血〉の比率の推計（Bender 2004: 71）からもうかがえる。この推計によれば、1845年では〈白人〉は0.03パーセント、混血は0.01パーセントを占めるにすぎず、1900年でも比率にしてその倍の、それぞれ0.06パーセント、0.02パーセントに過ぎない。<sup>12</sup> また、20世紀に入ってもポルトガル人入植者自体に非識字率が高かったことも特筆できるだろう（1950年センサスにおけるポルトガル本国の非識字率は40.4パーセント）。

それでは、植民地下にあった長い間、ポルトガル人が往来した海岸地帯の後背地では、どのようなことばが通商用の言語として用いられていたのでしょうか。少なくとも、コンゴ（ザイール）川河口部からルアンダに至る現在のアンゴラ北西部では、同じバンツール語であるキコンゴ語とキンブンドゥ語の両者が、時には混交しながらせめぎあっていたようである。この地域でポルトガル人が到達する以前から権勢を振っていたコンゴ王国では、主要言語としてキコンゴ語が用いられてきたが、コンゴ王国が衰微してポルトガル人の傀儡と化し、その後名目化すると、今度はキコンゴ語の南側に分布していたキンブンドゥ語が、キコンゴ語に影響されながらも力を持つようになる。すなわち、バンツール語話者のうちのわずかがポルトガル商人との媒介言語としてポルトガル語を会得していたのとは別に、後背地での媒介言語としてはキンブンドゥ語が通用していたと考えられる。Vansina は、ルアンダから送り出される奴隷は、出身地がどこであれキンブンドゥ語を教え込まれた上で船に積み込まれたとしている（Vansina 2001: 273-274）。

19世紀後半、列強のアフリカ植民地化が進み、いわゆる「アフリカ分割」が目前に迫ると、ポルトガル政府は「植民地としてのアンゴラ」によりやく関心

を向けるようになる。しかし、当初、国力に見合わない誇大な構想を持ち上げ  
ては、列強の干渉を受ける繰り返しに終始する。その代表例が、ポルトガル政  
府による「バラ色地図」構想（1877年）と、それがまさにバラ色の幻想に終わ  
る1890年のイギリスからの最後通牒である。「バラ色地図」構想とは、現在の  
アンゴラとモザンビークをつないで中南部アフリカを大西洋からインド洋まで  
横断するポルトガル植民地を確保しようとした構想である。イギリスにとって、  
カイロとケープタウンとを結びアフリカを縦断する領土の確保は譲れず、ポル  
トガル政府の構想は一蹴されることになる。

この展開は、当時の国際情勢から考えれば当然であったが、長年友好国であっ  
たはずのイギリスからの仕打ちに、ポルトガル国内世論は沸騰した。しかし、  
イギリスをはじめとするヨーロッパ列強は武力で対抗できる相手ではなく、そ  
の思潮は、過去のポルトガル海洋王国への懐古を中心に、植民地政策の実践よ  
りも観念論に流れる。結局、列強によるアフリカ分割の緩衝地帯として、19世  
紀末から20世紀初にかけてアンゴラとモザンビークはポルトガル領として認め  
られてゆくことになる。しかしながら、その後も両者は本格的な植民地政策が  
実施されないまま推移し、教育をはじめとする領内の住民への施策は相変わらず  
非常に限定的であった。

20世紀前半のアンゴラにおける言語教育に関する施策として注目されるのは、  
1921年12月、アンゴラ総督であったノルトン・デ・マトシュ Norton de  
Matos（1867～1955年）によって公布された法令第77号である。この法令の第  
一条では、宣教活動において、ポルトガル語教育の義務化と外国語教育禁止を、  
第三条では、「原住民」の言語の使用は、ポルトガル語の基礎教育の期間にお  
いて、公教要理（カテキズム、キリスト教信仰の導入的口授）の中で補助とし  
ての話しことばとして用いる場合のみ許可されること【主文】、公教要理にお  
いても、出版物をはじめいかなる形であっても「原住民」のこことばで書かれる  
ことを禁止すること【第一項】、ポルトガル語の対訳として「原住民」のこ  
ことばが並置されているものを除く、ポルトガル語以外の言語で書かれた宗教教本  
の使用の禁止【第二項】、「原住民」のこことばは、あくまで導入教育にのみ限定

し、(公の場での) 原住民間での濫用を防ぐとともに、ポルトガル語へのすみやかな移行に努力すること【第三項】がうたわれている。

ノルトン・デ・マトシュは、その晩年の1949年、当時独裁政を敷いていたサラザール首相のコントロール下にあった大統領制を批判して、自ら大統領選に出馬する(ただし投票日前に立候補取り下げ)など、リベラルな良識派と評される軍人・政治家であった。しかし、植民地においては先住民へのあからさまな同化政策をキリスト教会に依存して行う方針であった。すなわち、“開明的”と目されていた人物でさえ、「先住民蔑視かつ教育軽視」という、ネガティブかつ無施策であるポルトガル政府の「ネグレクト型植民地政策」を踏襲していたことが、この法令から明らかである。<sup>13</sup> こうしたポルトガル本国の怠惰な統治は、アンゴラを低開発な状況にとどめ、そのため先住民の文化保全に寄与したという皮肉な見方もできるだろう。しかし、アクセスが比較的容易な地域においては、ローマ＝カトリック系、<sup>14</sup> プロテスタント系<sup>15</sup>それぞれの宣教団が野放図な布教争いを行う原因ともなり、今日に及ぶ争乱の一因となっていることも確かである。

1950年代に入ると、アフリカ大陸各地で独立運動が盛んになり独立を支援する国際世論の高まりの中、本国の低品質高価格の工業製品を低開発の植民地に売りつけて成立する古典的な植民地依存を維持するために、ポルトガル政府は植民地経営を目に見える形で行い、それを正当化させる理論を構築しようとした。ポルトガル本国の余剰労働力を積極的に移民させ、インフラ建設、農業、鉱業を中心に開発を図るとともに、ポルトガル植民地制度の正当化については、ブラジルで育ったある論理の導入を図った。それが「ルゾ＝トロピカリズム」である。

「ルゾ＝トロピカリズム」詳細の批判的検討については他の機会に譲るが、この考え方は「ブラジルは混血によって社会発展が阻害されている」という欧米における社会ダーウィニズム的、優生学的言説への反発を淵源とし、「混血にこだわらないポルトガル人の気質とそれによってブレンドされた多様な人種を土壌として、柔軟でダイナミズムあふれるブラジル社会が生まれた」という

ものである。このためこの仮説は「人種民主主義」理論とも呼ばれる。

「ルゾ＝トロピカリズム」を体系化したのは、ブラジル人ジルベルト・フレイレ Gilberto Freyre (1900～1987年)であった。<sup>16</sup> しかし、上記の言説は、ブラジル並みには混血の進んでいないアンゴラなどポルトガル領アフリカ植民地にはそのまま当てはまらない。建前としての「ルゾ＝トロピカリズム」をポルトガル植民地の実情に合うように練り直すことが課題となった。フレイレ自身、ポルトガルの植民地保有を正当化する理論立案者の役目を積極的に果たすようになる。こうした彼の態度を明確に表し、ポルトガル人に対してアドバイスしている体裁になっているのがその著作、『ポルトガルと熱帯』(Freyre: 1961)である。「文明の新しい構造——ルゾ＝トロピカリズム——において、原住民やヨーロッパとは異なる文化を統合するポルトガル人的方法をめぐる提案」と副題が付けられた本書で、彼はポルトガルの現有領土すべてが、ポルトガル人の持つ資質のもと、将来「ブラジルの混血社会」になることで完成するという植民地政策<sup>17</sup>の目標を掲げ、現状は、「完成」に向かう<健全な>段階であるとして肯定する方法論を描いて見せる。この構図によって、当時「ポルトガル海外県」と呼ばれていたアンゴラなどのポルトガル領アフリカ植民地を<統合する>、すなわち実態としてはポルトガルの中に強引に押しとどめる概念を打ちたてようとする。この統合理念の紐帯として、ポルトガル語が重要視されたのは言うまでもない。<sup>18</sup>

しかし、この著作が出版された1961年は、アフリカの列強諸国が大量独立した「アフリカの年」1960年の翌年であり、ポルトガル領植民地においても、その独立志向を急造の支配理論で抑えきるには遅すぎたといえよう。

1961年に始まった解放戦争を経て、1974年のポルトガルにおける独裁政権崩壊の結果、アンゴラは1975年11月独立する。しかし、解放戦争下から、対ポルトガルゲリラ勢力は一枚岩でなく、主なグループとして、それぞれキンブンドゥ、バコンゴ、オピンブンドゥの各民族集団を母体とした MPLA、「アンゴラ国民解放戦線」(以下、FNLA)、UNITA の三者が各々の主張、別々の支援のもとに活動してきた。独立前後、これら組織間の対立が先鋭化し、そのまま内戦状

態に入る。ただし、首都ルアンダは一貫して MPLA の支配下にあり、MPLA は国土全域を掌握できないまま、一党独裁の形式で統治を続けた。MPLA は当初より、ソ連、キューバの支援を受け、共産主義を標榜した政党であり、独立後の国名も共産主義を国是として、「アンゴラ人民共和国」と名乗っていた。しかし1990年代に入り、ソ連が崩壊しそれまでの支援が期待できなくなると、1992年、MPLA はすばやく党是を変更し、憲法を改正して複数政党制による議会制民主主義の導入に大きく舵を取り、国名も「アンゴラ共和国」に変更した。続いて1993年には米国と国交を樹立する。

こうした政策決定の舵取りをする政治エリートはどのような属性だろうか。アンゴラの人口の多くが、言語的には元来バンツ語を話す集団に属する。しかし、ポルトガル人入植者とその子孫、メスティーンをはじめとした都市住民の一部は、ポルトガル語を話し、母語とする人々も多い。ポルトガル語を話す割合は、1990年の推計で人口の20パーセントとされている (Cuesta 1990: 15)。

As línguas nacionais 【国民言語】の構成要素

	言語名 (下線は本稿での呼称)	主な分布域	バンツ・ コード <sup>19</sup>	1976 年 <sup>20</sup>	1987 年 <sup>21</sup>	ラ ジ オ <sup>22</sup>	話者とされる主な民族名 (下線は本稿での呼称)
	※備考	分布する県名					国民人口比 (1988/[1950] 推計) <sup>23</sup>
アン ゴ ラ に お け る 三 大 バ ン ツ 語	<u>キコンゴ</u> 、 <u>コンゴ</u> Kikongo/Quicongo/Kongo	北西端 (海岸沿い)、 コンゴ民主共和国、コ ンゴ共和国、ガボン	H16s	○	○	○	<u>バコンゴ</u> Bakongo
	※アンゴラ国民解放戦 線 (FNLA) の母体	<u>ウイジェ</u> Uige/ <u>ザイ レ</u> Zaire/ <u>カビンダ</u> Cabinda					15% [11.6%]
	<u>キンブドゥ</u> Kimbundu/Quimbundo	北西部 (海岸沿い)	H20	○	○	○	<u>ムブドゥ</u> 、 <u>アンブドゥ</u> Mbundu/Ambundu
	※MPLA：現政権政 党の母体のひとつ (ポルトガル語を話 すメスティーンも 重要)	ルアンダ Luanda/ <u>マ ランジェ</u> Malanje/ <u>ク ワンザ</u> ・ノルテ Cuanza Norte / <u>クワンザ</u> ・スル Cuanza Sul/ <u>ベンゴ</u> Bengo					25% [26.1%]
<u>ウンブドゥ</u> Umbundu/Umbundo	西部、南西部 (海岸沿 い)	R11	○	○	○	<u>オピンブドゥ</u> Ovimbundu	
※UNITA の母体	<u>ベンゲラ</u> Benguela/ <u>ウアンボ</u> Huambo/ <u>ビ エ</u> Bié (西部)/ <u>ウイ ラ</u> Huila (北部)					37% [34.8%]	

教育言語に選定されたバンツィ諸語	<b>チョクウェ</b> Tchokwe/Chokwe/ Tshokwe <b>コクウェ Cokwe/Kôkwe</b> <b>ルンダ・コクウェ</b> Lunda Cokwe	北東部（内陸）、 <b>コンゴ民主共和国</b> <b>ルンダ・ノルテ</b> Lunda Norte/ <b>ルンダ・スル</b> Lunda Sul/ <b>モシーコ</b> Moxico（西部）	K11	○	○	○	<b>ルンダ=チョクウェ</b> Lunda-Chokwe  8% [8.6%]
	<b>ンガンゲーラ<sup>21</sup>、</b> <b>ンガンジェーラ</b> Nganguela/Nganguela <b>ガンゲーラ</b> Ganguela	南東部（内陸） <b>クワンド・クバンゴ</b> Cuando Cubango/ <b>モ</b> <b>シーコ</b> Moxico（東部）	K12b	○		○	<b>ガンゲーラ</b> Ganguela  6% [7.9%]
	<b>オチクアニヤマ、オシ</b> <b>クワニヤマ</b> Otchicuanyama/ Oxikuanyama <b>クワニヤマ</b> Kwanyama	南西部（内陸）、 <b>ナミビア</b> （北部）  <b>クネネ</b> Cunene（南東 部）/ <b>クワンド・クバ</b> <b>ンゴ</b> Cuando Cubango	R21		○	○	<b>オバンボ、アンボ</b> Ovambo/Ambo <b>シンドンガ<sup>25</sup></b> Xindonga（特に南東 端の住民、 <b>オバンボ</b> に 含めないこともある） 2%（シンドンガを含 めない） [1.5%]
	<b>ニャネカ、オルニャネ</b> <b>カ、ニャネカ=ウンビ、</b> <b>ニャネカ・ウンベ</b> Nhaneca/Olunyaneka Nyaneka-Humbi/ Nhaneca Umbe	南西部（内陸）  <b>ウイラ</b> Huila（南部）/ <b>クネネ</b> Cunene（北部）	R13	○		○	<b>ニャネカ=ウンビ</b> Nyaneka-Humbi（ニャ ネカとウンビを分離す ることもある）  [4.6%] <sup>26</sup>
	<b>ムンダ</b> Mbunda ※ <b>チョクウェ</b> の下位に 分類されることが多 い。	南東部 <b>モシーコ</b> Moxico	H21			○	
その他のバンツィ	<b>ヘレロ、ジヘレロ、エ</b> <b>レロ</b> Helelo/Tjichelelo/Herero ※ <b>アンゴラ</b> に分布する ものは <b>ヘレロ</b> の下位 概念の <b>ゼンバ</b> Zemba に分類されることも ある。	南西部、 <b>ナミビア</b> （北 西部・中東部）、 <b>ボツワナ</b> （北西部）  <b>ナミベ</b> Namibe/ <b>クネネ</b> Cunene（西部）	R31	○			<b>ヘレロ、エレロ</b> Helelo/Herero  [0.6%]
	<b>ソongo、ンソongo</b> Songo/Nsongo ※ <b>キンブドゥ</b> の下位 に分類されることが 多い。	北西部  <b>マランジェ</b> Malanje 南 部/ <b>クワンザ・スル</b> Cuanza Sul	H24			○	<b>ソongo、ンソongo</b> Songo/Nsongo
	<b>バンガラ</b> Bangala/Bangala ※ <b>キongo</b> の下位に分 類されることが多い。	北端  <b>マランジェ</b> Malanje 北 部/ <b>ルンダ・ノルテ</b> Lunda Norte	H34			○	<b>バンガラ</b> Bangala/Bangala

諸語	フィオテ Fiote ※キコンゴの下位に分類されることが多い。蔑称的他称。母語話者はイビンダ Ibinda と呼ぶ場合が多い。	北西部沿岸、カビンダ Cabinda	H16d			フィオテ Fiote (蔑称的他称)
	ルヴァール Luvale ※チョクウェの下位に分類されることが多い。	東部 (内陸) モシーコ Moxico	K14			ルヴァール Luvale
	ルバ、ツィルバ Luba/Tshiluba	コンゴ民主共和国 (中央部)、アンゴラ内陸北端のごく一部 ルンダ・ノルテ Lunda Norte 北端	L31a			バルバ、ルバ Baluba/Luba
コイサン Khoisan 語族諸語 ボスケマノス、ボシマネス (ブッシュマン) Bosquemanos/Bochimanes <input type="checkbox"/> 東部内陸: オバクウィシ Ovakwisi <input type="checkbox"/> 西部海岸: クング !kung (!=クリック音)	南部に点在、一部は移動民、ナミビア <input type="checkbox"/> 東部内陸 ウイラ Huila / クネネ Cunene / クワンド・クバンゴ Cuando Cubango <input type="checkbox"/> 西部海岸 ナミベ Namibe					<input type="checkbox"/> 東部内陸: クイシ CuiSSI <input type="checkbox"/> 西部海岸: クング Cungue

教育言語としてのポルトガル語の普及は、都市部で細々と行われていたポルトガル政府による教育と、独立後ポルトガル語を用いて教育した結果であるが、ポルトガル政府の教育への努力はごく限定的で、独立後の義務教育制度も内戦等の混乱によって、国民すべてに行き渡るにはほど遠い状況である。<sup>27</sup> また、独立前のポルトガルによる植民地政策下では、教育を受けポルトガル語で読み書きが出来るようになった<原住民>を<同化民> *assimilado(s)* / *civilizado(s)* とし、その他の<原住民>は<未開人> *indigena(s)* として分類して放置した。この施策によって、独立前からアンゴラ国民の間に「知識層」と「非識字の無知な人々」とを厳然と区別する社会階層が生じ、こうした格差が現在においてもポルトガル語普及の障壁として機能している。アンゴラ政府、政権政党である MPLA の中枢を握る政治エリートは、少なからずがメスティーンソとしてのアイデンティティを持つ旧<同化民>もしくはその子孫が中心で、母語もポルトガル語であることが多い。

一方、大西洋沿岸の都市部周辺を中心に、マスコミの普及等の影響もありエリート以外にも日常生活における媒介言語としてポルトガル語が普及しつつあるが、この場合、語法や語彙においてバンツァ諸語が濃厚に影響している場合が多い。そのレベルは上記の教育に接する機会に比例して、軽微なものからクレオール言語とみなされるものまで多岐にわたる。

#### 4. アンゴラ・アイデンティティの行方

ここまで述べた経緯を背景として、現在のアンゴラでは「アンゴラ性なるもの」を指す「アンゴラニダーデ」*Angolanidade*をいかに確立するかが、非常に重要な問題となっている。

アンゴラニダーデは、前項で言及したポルトガル独裁政権が植民地支配を継続する大義名分として利用した「ルゾ＝トロピカリズム」を変形し、再構築した一面を持っている。しかし、その要素だけでは植民地主義の焼き直しに過ぎず、いかに「アンゴラらしさ」を加味するかが、対外的に説得力のある「国民国家」としてのアンゴラを確立させ、なによりもアンゴラ国民が納得する形で「アンゴラ人」としてのアイデンティティを持ち得る鍵となる。

そのためには、アンゴラ国民の大半を占めるバンツァ諸語話者の言語的基盤、つまり、バンツァ性をアンゴラニダーデの中に取り込む必要がある。しかし、アンゴラの内戦はまさしくバンツァ性を帯びる勢力どうしの争いであったことを思い返さなくてはならない。また、バンツァ諸語は列強のアフリカ分割の結果できたアンゴラの国境線を越え、南部アフリカ一帯に広がっている。そこには、バンツァ意識をつなぐ「汎バンツァ主義」があり、場合によってはアンゴラの安定を脅かしかねない。すなわち、バンツァ性をアンゴラニダーデの中に取り込む際には、細分化されたバンツァ諸語話者間の分立主義と、バンツァ意識を包括する「汎バンツァ主義」の双方の功罪を把握した上で、アンゴラに合うようにサイズを調整する必要がある。この調整を進めるために具体的にどのような枠組みをつくるのが懸案となっている。

この問題を扱った例として、首都ルアンダ発行の日刊新聞 *Jornal de*



Angolaのコラムニスト、ワザニ Wa-Zani による、「正真正銘のアンゴラ人？誰のことを言っているのか？」と題された2007年10月4日の記事がある。この中で、次のように議論を展開する。<sup>28</sup>

はじめに、

1498年、ポルトガル人ヴァスコ・ダ・ガマやバルトロメウ・ディアスが喜望峰を発見した時、「バンツー」はまだそこに着いてはいなかった。アルトゥーナ神父 Pe. Raul Ruiz de Asúa Altuna は、『バンツー伝統文化』<sup>29</sup>において、これらの人々は17世紀のはじめになってようやく、アフリカ大陸の南の地に到達したに過ぎないとする。興味深いことに、ほぼ同時に、海路でオランダ人がそこに着き、オランダ東インド会社が1621年に設立され、ヤン・ファン・リーベックによって1652年の4月にケープタウン（の町）が置かれた。〔（ ）は筆者による。以下同じ。〕

と説いて、アフリカ南部地域においてバンツー性は、侵略者として国民アイデンティティから排除される傾向にある＜白人＞と同じほどしか歴史的経緯がないとして真正性の象徴とすることに疑問を呈した後、

現実には、サハラ以南アフリカの大部分、すなわち、アフリカ中部や南部には、わずかにピグメウ<sup>30</sup>（今日、コンゴ民主共和国の森林地域に居住）そして、——アンゴラでは、（今では）『バンツー』によって占められている、南緯14度以南のアンゴラ南部一帯に散らばっている——コイサンのみが住んでいたのだ。

と展開する。そして、

『正真正銘の』アンゴラ人とか『固有の』アンゴラ人とか話す時、『真正の』とか『純粹の』とかいう意味において、『本物の』とか『正統の』<sup>31</sup>とかいう脈絡において、われわれアンゴラ人はいったい何を言おうとしたいのか？おそらく、アンゴラの最古の（最古から住む）人々の生きた代表、すなわち、今日（個々の）集団群に孤立して生きている移動狩猟採集民に対してのことであろうか？

と、アンゴラ人の真正性を議論するなら、それに値するのは南部のコイサンのみではないかと疑問を呈する。

さらに、

しかしながら、今日、これらの正統で本物であり固有のアンゴラ人は（投票者）登録されているだろうか？〔中略〕彼らはアンゴラ人である権利がある。しかし、彼らの名前を投票者カードに記載することは困難である。というのは、（彼らにとって）役場の登記所でIDカードを作るために自らの名前を書くことは常に困難だったからである。植民地時代には彼らが『同化された人間』<sup>32</sup>のカテゴリーで勘定されたことは決して無かったし、現在においても、彼らが算入されている統計などだろうか？

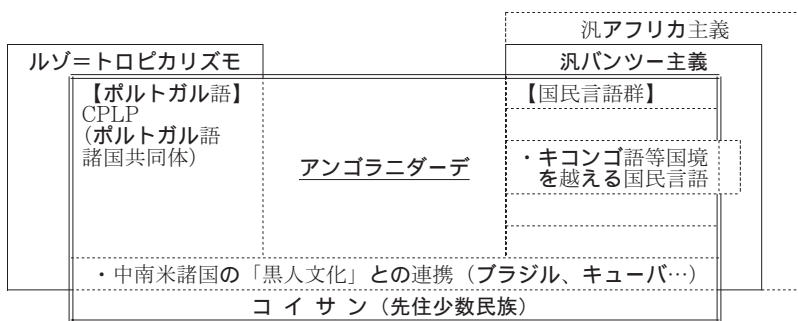
とした上で、アンゴラニダージェの平和でバランスの取れた確立を提唱して結んでいる。

上記の言説では、コイサン諸語話者が移動民であることや教育水準が低いことから、今はアンゴラ人として住民登録されることさえまならないにもかかわらず、もし、「真のアンゴラ人」という議論を突き詰めるならば、年代の上からは「少数民族」のコイサン諸語話者のみが当てはまると牽制する。これによって、今日まで「真のアンゴラ人」であることはいかなる存在かについて議論を戦わせ、それが内戦の一因となるような緊張と反目につながっていたバンツール諸語各言語話者間による過度な自己主張を戒める、という図式を取っている。

この記事では、バンツール諸語話者の南進については、アンゴラ到達の年代をわざと遅く勘定している感がある。しかし、いずれにしる筆者が強調しようとしているのは、その出自、歴史的経緯に大きな差のないバンツール諸語話者間が、安易な愛郷主義（いわゆる〈部族主義〉）に陥り、反目しあうことがいかに空しいものであるかについてである。これを緩和し、強固なアンゴラニダージェを打ち立てるためには、これまでアンゴラニダージェの要素として捉えられていたものとは異なる、コイサン諸語話者の「原アンゴラ性」に注目してもよいのではないかという論調である。

この視点は、アフリカに先んじて19世紀を中心に独立したラテン・アメリカ諸国が、その歴史的正当性を後付けで説明するとき、頻用されたものと相似していることは指摘すべきであろう。例えば、同時代を生きる先住民の子孫は、社会的に排除されていたにもかかわらず、国家の独自性、「国民性」を高めるために持ち出された先住民として、メキシコのアステカ、マヤや、ブラジルのトゥピなどを挙げることができる。メキシコでは、上記の先住民が過去打ち立てた文明の栄光を現在の国家が受け継いでいる、というインディヘニズム *indigenismo* と名付けられた国家統合理論が打ち立てられた。ブラジルの場合、トゥピは過去、「文明」の担い手として扱われることもないまま、少数民族、少数言語話者となってしまっているが、実はブラジル性を先取りするような誇るべき独自性があるとする「トゥピ・マニア」の思潮がある。特に後者ブラジルの「トゥピ・マニア」は、上記のコイサン諸言語話者に注目する考え方と似通っている。

ワ＝ザニの言説を踏まえたアンゴラニダーデの構成を図式化すれば【図3】のようになる。



【図3】「アンゴラニダーデ」の構成模式図 (Wa-zani の言説を図式化)

## 5. アンゴラ言語政策の動向

ここまで論じた構造の中で、近年の内戦の終結と原油産出を基盤とする政治経済の安定によって、アンゴラ政府の言語政策への関与が顕在化しはじめた。

ここでは、ここ数年の動向についてまとめる。

アンゴラ共和国国会での承認を経て、2001年12月31日「教育制度基本法」*Lei de Bases do Sistema de Educação* (Lei 13/01 de 31 de Dezembro de 2001) が公布された。この法律では、第8条「義務制度」で初等教育（以前の4年間から6年間に変更）が義務教育（同じく4年間から6年間に変更）であることの明示されていることに続いて、第9条は「言語」に充てられている。条文は次のとおりである。<sup>33</sup>

1. 学校における教育はポルトガル語によって行われるものとする。
2. 国家は国民言語 *línguas nacionais* の使用と教育を目的とした人的、科学技術的、物質的、財政的条件を促進し確保する。
3. 本条文第一項に拘泥されることなく、とりわけ成人教育分野において、教育は国民言語 *línguas nacionais* によって行うことができる。

現行のアンゴラ共和国憲法には公用語を規定する条文はない<sup>34</sup>が、上記の教育制度基本法第8条第1項を見る限り、教育上のポルトガル語の使用優位性は明確であろう。第2項、第3項では、「国民言語」について言及されている。しかしながら、（労働力の識字化促進を目的としている第3項での「成人教育」以外において特に）ポルトガル語との関係性が不明瞭なままとなっている。<sup>35</sup> 本法律では、国民言語の教育制度への導入を慎重に言及した、というところであろう。実際、本法律に準じて作成された教育省による教育制度改革に関するレポートである『アンゴラおよびその教育制度の全般的特質と教育制度』では、初等教育カリキュラム、中等教育第一期カリキュラムの分冊<sup>36</sup>いずれにも、その冒頭部分に、

アンゴラは、アフリカ南部に位置し、(中略)

(アンゴラは) ウンブンドゥ語 *Umbundu*, キンブンドゥ語 *Kimbundu*, キコンゴ語 *Kikongo*, チョクウェ語 *Tchokwe*, ンガンジェーラ語 (ンガンゲーラ語) *N'ganguela* のような他の *línguas nacionais* が存在するも、ポルトガル語が公用語でありアンゴラ人とのコミュニケーション言語となっている、複数言語の国

*pais plurilinguístico* である。

公式の教育 *O ensino formal* はポルトガル語で行われるが、一方、カリキュラムに *línguas nacionais* を入れる可能性について政府レベルでの議論が存在する。

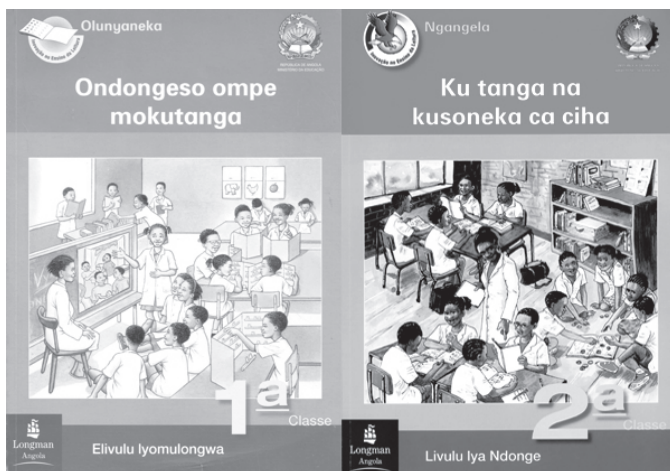
という国民言語については及び腰の言及にとどまっている。

偶然ながら「教育制度基本法」が公布された数ヵ月後、サヴィンビが戦死し和平が実現するという奇貨を得て、ようやく言語政策が現実化しはじめた。現在、アンゴラの言語政策を統括しているのは、アンゴラ国民言語院 *Instituto de Línguas Nacionais* (以下 ILN) である。この機関は、アンゴラ政府の「国民言語」を用いた言語教育についての提言やプログラム策定を行ってきた。現代表で、言語学者であるヴァトゥメネ・クカンダ *Vatumene Kukanda* が、それまでつとめていた国際パンツァー文明センター *Centre International des Civilisations Bantu* (以下、CICIBA<sup>37</sup>) 代表から転じる形で2005年に就任してからは、特にそのプレゼンスを増している。クカンダは、語彙借用の弊害に留意しながらも、国民言語の語彙を増やすためにポルトガル語語彙を活用すべきだとしているのは、注目してよいだろう。<sup>38</sup>「国民言語を軸としたアンゴラニダーデ構築」を中心に据えつつ、汎パンツァー主義、ポルトガル語の言語文化双方も活用しようとするのがクカンダの考え方であり、アンゴラにおける言語政策の見取り図を立てる重要な立場にある。さらに、教育言語として教育現場に導入されることを進めるため、ILN では、クカンダが陣頭指揮を取り現在「国民言語」各言語の正書法統一が進められている。

こうした努力が実り、教育省のアンゴラ学制調査・発展局 *Instituto Nacional de Investigação e Desenvolvimento Escolar* (以下 INIDE) が組織する形で、2005年における国民言語での教育のための教員養成、2006年度における国民言語での教育試行に続き、2007年度からは、アンゴラの一部地域での国民言語による初等教育が始められた。教育言語として、地域によってキコンゴ語、キンブドゥ語、ウンブドゥ語、チョクウェ語、ンガングーラ語、クワニャマ語の6言語(のちにニャネカ語が加えられ7言語)が選定されてい

る。2007年度は、4500人の第一学年の児童が参加した。例えば、ウンブドゥ語が選定されているアンゴラ中西部内陸のウアンボ市（旧ノーヴァ・リジュボア [新リスボン]）では、15名のウンブドゥ語教師が養成されたうえで、2007年度には2小学校で約500名の1年次児童がウンブドゥ語での読み書きを習いはじめている。<sup>39</sup>

なお、試行段階においては、多言語による教材開発の経験がある出版社でケープタウンに本社があるマスキュー・ミレー・ロングマン *Maskew Miller Longman*（以下、「ロングマン」、ロンドンに本部のある教育出版のピアソン *Pearson* 社傘下）など南アフリカ共和国の2業者が、教員養成、児童および教員用の教材開発などの業務を委託されている。さらに、2008年秋からは、2009年度の国民言語での教育機会拡大を目的に、ピアソン/ロングマン、ヨハネスブルク近郊に本部を置く言語政策請負会社のモルテーノ *Molteno* の両組織が児童への教科書配布のプロジェクトを開始している。この対象言語には、上記にあわせてニャネカ語の計7言語が選定されている。2008年7月には、南アフリカ共和国のケープタウンにあるロングマンの事務所において、対象言語



【図4】「国民言語」教科書の表紙（左：ニャネカ語小学一年用、右：ンガンゲーラ語小学二年用）

に精通したジャーナリスト、教師が集まって教科書の細部を検討した。2009年度には、アンゴラ18県のうちの8県において、小学校1年次、2年次用の教科書が配布された。今後は、順次、アンゴラ全土の6年次まで拡大される予定となっている。また、2011年に対象児童の識字率調査が行われる予定で、この調査でプロジェクトの成否が確認される見込みとなっている。<sup>40</sup>

近年は政府高官の国民言語への言及も目立つ。毎年1月8日は、作家で初代大統領をつとめたアウグスティニョ・ネットが、1978年の同日にアンゴラ文化に関する歴史的演説をしたことで「文化の日」とされている。30周年にあたる2008年のこの日、南部ナミベでスピーチを行ったカルドーゾ Boaventura Cardoso 文化省大臣は、国民言語での教育開始について言及し、「各々の言語は平和な共存の要素、そしてグローバルとローカルとのつなぎ目となる要をかたち作るに違いない」と語った。さらに、「識字や初等教育の大きな伸び、知識や労働市場での競争力の獲得のような、極端な貧困や飢饉に対する戦いにおいて戦略的位置を占め、社会統合の要素として貢献している」と述べている。<sup>41</sup>

こうした「国民言語」再認識の歩みを総括する形で、2008年10月15日～17日にウアンボで第三回国民言語会議が開催された。この会議の最後に、「アンゴラのすべての地方において、初等・中等・高等教育における国民言語による教育を義務化すべきである」というコミュニケが出され、付随して次の通りの提議がなされている。<sup>42</sup>

- ・国民言語による教育は、すでに実施された科学研究、公式に承認された書記法、アンゴラ文化の現実に即して練られた内容に従い行われるべきである。
- ・国民言語による教育を推進するために、教員および教員養成担当者の充実を図ることが肝要である。
- ・すべての国民言語において、書記法が現状に合致し、調和が取れるように努力しなければならない。
- ・憲法、政党法、人権宣言など重要な法律制度は各国民言語に翻訳されるべきである。
- ・国民言語基本法を早期に制定すべきである。

一方、2008年3月にはヨハネスブルクで、「国家言語政策と国境を越える言語／分布が限定される言語の役割」をテーマとする国際会議が開かれ、アンゴラからもILN クワンダ代表が参加している。<sup>43</sup> 南部アフリカ諸国が集まり言語政策について議論する目的で行われる国際会議はこれがはじめてであり、南部アフリカでの国境を越えた言語政策の連携はますます強められる傾向にあるといえるだろう。

## 6. おわりに

独立以来30年にわたる内戦、それ以前の独立戦争を含めると40年に及ぶ戦乱からようやく抜け出したアンゴラは、折からの資源ブームも手伝って、ようやく経済的基盤を確立しつつある。その一方、独立前から引き続く民族対立を緩和し、国民和解を獲得する手立ての模索は、緒についたばかりである。

こうしたなか、民族対立を解消し、「アンゴラ国民」として統合する上で、「アンゴラニダーデ」すなわち、統合原理としての「アンゴラ性」を確立することは大きな課題となっている。「アンゴラ」という国家自体、その国土は列強による植民地分割の結果であり、その歴史的経緯を踏まえた上での現実的な「アンゴラニダーデ」は、(1)一般に＜部族主義＞と呼ばれることが多い、各「言語民族集団」を構成する人々の間での愛郷主義、(2)アフリカ南半を横断する「汎バンツー主義」、(3)植民地時代の支配者側の統合原理として主張された「ルゾ・トロピカリズム」、以上3つの微妙なバランスを保ちつつ構築する必要がある。

この構造の中で、住民のバンツー性を司る最大の要因である「バンツー諸語を話すこと」にしても、「アンゴラ性」の支柱である、多様な文化の共存の舞台という論理にしても、その前提は、「国民言語」と呼ばれている言語群の存在がある。

すなわち、現地のことばについて、「国民言語」と名づけ、これらを教育言語にすることは、上記の「アンゴラニダーデ」構築に次の3つの点から貢献するといえる。(a)各言語が「国民言語」として認められることによって、「言語



民族集団」としての狭隘な愛郷主義から脱却するシンボルとなることができる。

- (b)「国民言語」に当たる言語はいずれもバンツァー諸語であり、「汎バンツァー主義」をこれらの言語話者間を結びつける統合理念として取り込むことができる。
- (c)「国民言語」を、公的コミュニケーションの媒介言語としての地位を独占しているポルトガル語と並置することによって、従来の「ルゾ・トロピカリズモを支える唯一の公的言語ポルトガル語」という構図を焼き直し、アンゴラの独自性、すなわち「アンゴラニダーデ」を支える言語社会構造を作り出すことができる。

このように、「国民言語」は、「愛郷主義」・「汎バンツァー主義」・「ルゾ・トロピカリズモ」という、お互い性格の異なる集団アイデンティティの間を調整し、「アンゴラニダーデ」を結実させる触媒としての役割が期待されている。しかし、この言語群は、植民地経営をしていたヨーロッパ側（ポルトガル人）からのちには、ヨーロッパのことば（主にポルトガル語）を話す<黒人>を含めた都市住民から長らく<土俗方言>*dialectos indigenas*として差別され蔑まれた経験を持つ。アイデンティティの中核として機能するような確固とした地位を回復するのは容易ではない。このためにも、アンゴラ以外のバンツァー諸語が話されている国々との「汎バンツァー」的つながりも、バンツァー諸語のイメージ改善に必要であろう。また、「国民言語」の中に含まれる言語の中には、キコンゴ語やヘレロ語のように近隣諸国にまたがって分布する言語も含まれている。このようなことばは、社会的認知の向上、教材開発などで国際協力を取り込み、ひいては「国民言語」の認知、教育言語としての普及のてことなる可能性を持っている。しかしながら、言語政策の国境の外からのてこ入れは、偏った言語に優位性を持たせ、各「国民言語」間に上下、貴賤の概念を植えつけかねないことも留意すべきであろう。過去、「コンゴ至上主義」の立場からゲリラ活動を行った FNLA の例を引くまでもなく、「汎バンツァー主義」が「アンゴラニダーデ」の構図の中から抜け出し、これを陵駕して、国家の枠組みの中ではコントロール不能となる危険性もはらむ。実際、ここ数年の「国民言語」を用いた多言語教育が、南アフリカ共和国企業のノウハウと組織力を基に進められている

ことは、注視してよいであろう。

さらに、第三回国民言語会議でもうたわれているように、教育に具するため各国民言語における書記法の固定が急がれている。しかし、多様な言語が輻輳的に用いられているアンゴラの言語状況を「仮にまとめている」性格の強い少数の国民言語を軸として、固定された書記法に性急な形で糾合するのは、言語の多様性尊重という名目に逆行してしまう。言語的に「周縁化」されてしまう住民の反目を生む可能性も否定できない。

こうした面からも、今後アンゴラ政府がどのような言語政策を策定し、実行に移すかは注視してゆくべきであろう。

アンゴラをはじめ、アフリカ大陸でポルトガル語が公的の場で用いられているモザンビーク、ギニア・ビサウ、スペイン語が公用語とされているムピニ（赤道ギニア共和国の大陸部）においては、多くの言語が話されているが、それらへの関心と研究は、英語圏、フランス語圏諸国に比べ立ち遅れている。

このようなアンバランスな状況を打開し、サハラ以南のアフリカ大陸における地域的に均整の取れた地域研究を進める上で、サハラ以南の非英語・非フランス語圏で最大の面積を占めるアンゴラの言語状況を把握することは不可欠である。これからも継続的に考察してゆきたい。

なお、本稿に掲げたアンゴラの地名・言語名などの呼称については、アンゴラカトリック大学人文学部卒業生で、現在神戸大学研究留学生の Eduardo Gervásio Daniel 氏に逐一確認していただいた。ここに謝意をしるす。

アンゴラ言語政策史・現代史年表

1975	11. ポルトガルから独立
1977	5. 前内相アルベスによるクーデター未遂 11. ネット大統領の言語政策提言
1978	教育省に教育調査・発展局 (INIDE) 発足
1979	9. ネット大統領死去、エドゥアルド・ドス・サントスが大統領を継承
1980	SADCC (南部アフリカ開発調整会議) 発足、アンゴラは原加盟国
1983	CICIBA (国際バンツウ文明センター) 発足

1986	第一回「文化に関する国家シンポジウム」開催、「国民言語」の重要性確認
1987	アンゴラ政府、キンコンゴ語、キンブンドゥ語、チョクウェ語、ウンブンドゥ語、ムブダ語、クワニャマ語の6国民言語に対して、書記化とそのふさわしい転記法を仮承認
1988	12. 国連アンゴラ検証団 (UNAVEM) 発足 (I～III期、97. 6まで)
1989	飢饉。政府、国際機関に緊急食糧援助を要請
1991	政府/MPLA 民主主義化、多数政党制への移行を決定 (共産主義一党独裁の放棄) ILN、第一回「国民言語会議」開催 5. ビセス合意 (包括和平協定) 調印、総選挙実施の道筋立つ
1992	4. 憲法改正法案の議会承認 8. SADCC、SADC (南部アフリカ開発共同体) に改組 9. 初の国政選挙 (国会議員選挙および大統領選挙)、選挙 MPLA 辛勝、大統領にはドス・サントス現大統領選出 (再任)、UNITA 結果認めず、内戦の激化
1997	4. GURN (国民統一和解政府) 樹立も UNITA は参加せず 6. 国連アンゴラ監視団 (MONUA) 発足 (99. 2まで)
1999	10. 国民言語による国営放送局 Radio N'gola Yetu 開局 アンゴラ、CEEAC (中央アフリカ諸国経済共同体、仏語圏中西部アフリカ中心) に加盟
2001	12. 教育制度基本法 [2001年第13号法] 成立 (ポルトガル語、国民言語での教育規定)
2002	2. UNITA 議長サヴィンビ戦死 4. 政府—UNITA 間停戦合意覚書署名 (ルエナ Luena 協定)
2003	11. 国立アウグスティーニョ・ネット大学にアフリカ言語についての講座常設
2004	8. 第一回アンゴラ作家会議、国民言語による書記の重要性確認 9. 第二回「国民言語会議」開催
2005	3. アンゴラ国家文化法の政府法案まとまる
2006	2. 国民言語での教育試行開始 2. 「文化領域における科学調査コミッション」の発足 8. 政府、カビンダ対話フォーラムと「カビンダ州の平和と和解のための合意覚書」締結 9. 第三回「国家文化シンポジウム」開催
2007	1. OPEC 加盟 2. 国民言語での教育開始、適用言語: チョクウェ語、キンブンドゥ語、キンコンゴ語、ンガンゲーラ語、クワニャマ語、ウンブンドゥ語 (のちにニャネカ語が加えられる)
2008	9. 国会議員選挙 (一院制、220議席: MPLA の圧勝) 10. ウアンボ (アンゴラ中西部) にて「第三回国民言語会議」開催

## 注

- 1 選挙結果は、<http://www.jornaldeangola.com/> からの記事検索および、[http://www.eueom-ao.org/EN/PDF/FR\\_EUEOM\\_ANGOLA\\_08\\_EN.pdf](http://www.eueom-ao.org/EN/PDF/FR_EUEOM_ANGOLA_08_EN.pdf) による (2009年5月1日アクセス確認)。

- 2 以下、従来無批判に用いられることがあったものの、筆者が不適切と判断する語句には < > を用いる。なお、梶・砂野 (2009:4-6) を参照のこと。
- 3 (as) *línguas nacionais* の訳語には注意を要する。米田 (2002:167) は、ナミビアで用いられる National Languages という用語について『ナミビアの諸言語』の意味で、日本語で言うところの『国語』あるいは『国家語』といったステイタスはない。」と言及しているが、アンゴラの *línguas nacionais* による教育・公的使用の現状は、ナミビアの状況にも達していない。このため、事実上公用語みなしであるポルトガル語の立場との比較においては、「アンゴラの諸言語」もしくは「国内 (諸) 言語」等が似つかわしく、「国家 (言) 語 (群)」といった訳語は不適切であろう。他方、< 部族方言 > とみなされていたこれらの言語を *línguas nacionais* に見立て、国民意識の凝集力として利用しようとする政治意識も独立運動前後から連綿としてあることも事実である。本稿ではこれらの事情を勘案し、「国民言語 (群)」とする。
- 4 世界銀行のウェブサイト <http://www.worldbank.org/> のデータベースより検索。(2009年5月5日アクセス確認) なお、人口は、1999年の国連推計では1235万人。一人当たり国民所得は、アトラス方式の GNI per capita で表示。ちなみに、1997年340米ドル、以下、2000年420米ドル、2005年1360米ドル、2006年1970米ドルと少なくとも数字のうえでは順調に推移している。
- 5 アンゴラ教育省資料 <http://www.inide.angoladigital.net/pdf/EPT%20Angola.pdf> より。(2009年5月1日アクセス確認) なお、世界銀行2001年15歳以上識字率推計 (67パーセント、<http://www.worldbank.org/>) およびユニセフ2000年15歳以上識字率推計 (67パーセント、[http://www.unicef.org/infobycountry/angola\\_statistics.html](http://www.unicef.org/infobycountry/angola_statistics.html)) と大きく異なる (ともに2009年5月5日アクセス確認)。
- 6 原図の出所 : [http://www.nationalgeographic.co.jp/places/places\\_countryprofile\\_preview.php?COUNTRY\\_ID=2](http://www.nationalgeographic.co.jp/places/places_countryprofile_preview.php?COUNTRY_ID=2) (2008年9月15日アクセス確認)。
- 7 ポルトガル語では *negro* は一般的に蔑称ではないとされている。一方、*negro* と同じく元来「黒色の」という形容詞である *preto* はいわゆる < 黒人 > の意味合いで用いると蔑称。
- 8 アンゴラ革命評議会の政令 (デクレト ; フランス語のデクレ) 1976年第80号 (Decreto 80/76 do Conselho da Revolução; 1976年11月13日制定)。条文中には次の文言がある。「(首都ルアンダの) 人類学博物館 (o Museu de Antropologia) は、アンゴラ国土をカヴァーする民族学的資料 (objectos etnográficos) によって、すなわち、アンゴラにおけるすべての言語民族集団 (todos os grupos etno-linguísticos de Angola) である、Kikongo, Kimbundu, Umbundu, Lunda Cokwe, Nganguela, Nyaneka-Humbi, Helelo, Ociwambo および Khoisan によって構成される。」
- 9 従来、コイサン諸語話者の一部は、彼らに共有するとされる身体的特徴から < カポイド Capoid 人種 > と呼ばれ、他のいわゆる < 黒人 > と区別されることが多かった。しかし、身体的特徴と言語分布は一致しない。また、アンゴラ南部ではバンツー諸語話者集団とコイサン諸語話者集団との混血も進んでいる (この場合、言語使用はバンツー諸語にシフトする場合が大半である)。このため、言語学的な特徴以外でコイサンを他者と区別することは困難である。また、多様な言語を「コイサン諸語」と一つ

に括ること自体にも批判が多い (Henderson, 1979:63-65).

- 10 原典出所 : <http://www.iss.co.za/Books/Angola/6Malaquias.pdf> (2008年9月15日アクセス確認)。
- 11 現在アンゴラの地域からは、この期間、北米へも多数の黒人奴隷が送り込まれた。Frey & Wood (2003:390) は、1730年代後半にチャールストン (現米国サウスカロライナ州) に送り込まれた8045人の「アフリカ人」のうち、およそ70パーセントがアンゴラの出身、他の6パーセントが西アフリカのガンビアからシエラレオネ周辺の出身と推定している。
- 12 ちなみに、これ以降は、1920年、1940年、1950年、1960年、1970年の順で、<白人>がそれぞれ0.48、1.20、1.90、3.60、5.10パーセントで、<混血>は0.18、0.75、0.72、1.10、1.57パーセントで推移している (Bender 2004: 71)。
- 13 一方、ノルトン・デ・マトシュは、民族学者ディニスを「原住民政次官」に任命し、人口分布調査も含めたアンゴラ初の体系的な先住民調査を行わせている (Diniz: 1918)。
- 14 ローマ=カトリック系のミッションは、首府ルアンダから北が中心であり、これが本格化したのは1880年代に入ってからである。しかも、1910年にポルトガル本国で王政が倒れ、共和制が敷かれると、政教分離の原則を持ち出す政府と教会の関係は不安定なものとなり、海外領土におけるミッションも停滞した。この状態は、1940年のサラザールとピオ12世との宗教協約成立まで続く。なお、この地域では、北半のキコンゴ語が話される区域にバプテスト、ルアンダ周辺にはメソジストの新教系ミッションが入っており、ローマ=カトリックに次いで一定の勢力を確保している。
- 15 プロテスタント系で目立つミッションとしては、1880年よりアンゴラでの宣教を行った米国の会衆派教会系宣教師 American Board of Commissioners for Foreign Missions (ABCFM) のミッションである (Edwards, 1962:24-25, Neves, 1975:140, Henderson, 1979:150-152)。彼らは、首府ルアンダから遠くポルトガル植民地政府からの監視がきかない、アンゴラ南西部の高原で集中的に宣教した。彼らは、ローマ=カトリックの宣教師とは異なり、現地の言語を積極的に宣教に利用した。ノルトン・デ・マトシュの宣教におけるポルトガル語以外の制限策も、ABCFMの宣教方法を憂慮したことが端緒となっている。この現地語制限後も、対訳式の教理読本の出版は可能であったので、ウンブドゥ語書記は衰えなかった (Henderson, 1979:151)。こうして、いわゆる *Native Church* が組織されるようになると、この地に住んでいたウンブドゥ語を話す住民は、オピンブドゥ民族として強く自意識を持つようになった。こうした経緯によって、オピンブドゥの間に選民的意識が植えつけられ、一方、周囲の集団からは異分子として捉えられるようになった。例えば、この地域の東方に住むガンゲーラからは Ovimbali すなわち、「白い人間と住む者」もしくは「白い人間を真似るもの」という他称を付けられた (Edwards, 1962:7)。こうしたオピンブドゥの差異化が、彼らが中心勢力であった UNITA の執拗な抵抗を生む一因となった。
- 16 主著にフレイレ (2005=1933)。なお、1938年にはすでにサラザール首相からポルトガル歴史学アカデミーから推挙されており、それにこたえる形で、ポルトガルで *Uma cultura ameaçada: a luso-brasileira* 「脅かされた文化 : ルゾ=ブラジル文化」

- なる題目の講演を行っている。
- 17 ポルトガル政府による海外植民地の公的呼称は、19世紀～1933年「海外県」、1933年～1951年「植民地」、1951年～独立まで「海外県」と変遷する。1951年の「海外県」への再度の変更は、フランスの「海外県」制度を意識し、ポルトガル本国との一体性を強調しようとしたものであるが、これらの期間を通じて「植民地」*colônia(s)* ということばも並行して用いられた。
  - 18 ポルトガル語の紐帯としての役割を明確に示すため、フレイレは、ポルトガル人の海外雄飛を称揚した、ポルトガル語文学の最高傑作とされるカモンエスの『ウズ・ルジアダス』を持ち出している。‘Camões, lusista e tropicalista’ (Freyre, 1961: 123-139).
  - 19 バンツ語諸語を比較言語学・地理言語学的に分類した Guthrie (1967-71 [原案1948]) による言語コード。後年の研究によるバンツ語諸語コードとの比較は、Jouni Maho が作成した下記資料を参照 <http://www.african.gu.se/maho/downloads/bantulineup.pdf> (2009年5月1日アクセス確認)。
  - 20 注8参照。
  - 21 年表の1987年の項を参照。
  - 22 国民言語による国営放送局 Rádio N’gola Yetu での放送枠のある言語 (2008年末現在)。
  - 23 1988年の推計は、米国議会図書館サイト (2009年5月1日アクセス確認) [http://lcweb2.loc.gov/frd/cs/angola/ao02\\_03a.pdf](http://lcweb2.loc.gov/frd/cs/angola/ao02_03a.pdf), 1950年の推計は、*Anuário Estatístico de Angola*, Luanda (1956:21) による。
  - 24 元来は「東方」を意味する他称である。
  - 25 Péliissier (1997:337) は、Lima (1970) の民族地図で示されているシドンガをオカバンゴ Okavango(s) と書き換えた上で、欄外に「実際のところは、オカバンゴの分布域は相当に小さく、いくらかの著作では筆者はこの集団が人工的であるとさえ考えている。」という注をつけている。
  - 26 1950年におけるニャネカとウンビの構成比は、およそ4 : 3 (*Anuário Estatístico de Angola*, Luanda, 1956:21)。
  - 27 植民地時代末期のアンゴラの農村部でのポルトガル語普及について、Bender (2004:353) は、Heimer (1974) を引用して、次の数字を挙げている。ポルトガル語能力については、「完全に話す」0.1パーセント、「比較的流暢」0.4パーセント、「意思疎通に問題のないレベル」16パーセント、「少しは話す」24パーセント、「全く知らない」59パーセント。また、ポルトガル語使用については、「ポルトガル語をいつも話す」0.1パーセント、「ある程度の頻度で話す」0.8パーセント、「ほとんど使わない」31パーセント、「全く使わない」59パーセント。
  - 28 <http://www.jornaldeangola.com/> より記事検索 (2008年9月15日アクセス確認)。
  - 29 Raul Ruiz de Asúa Altuna, *Cultura tradicional Banta* (Luanda: Secretariado Arquidiocesano de Pastoral, 1993: 2ed.).
  - 30 ポルトガル語 *pigmeu*。日本では従来の英語呼称にしたがい「ピグミー」と呼ばれることが多い。

- 31 『 』付きで用いられている形容詞の原文における単語は次の通りである。こうしたことばが、アンゴラ人アイデンティティがどのようなものかを議論するうえで繰り返し用いられている。『真正正銘の』 *genuínos*, 『固有の』 *autóctones*, 『真正の』 *auténticos*, 『純粋の』 *puros*, 『本物の』 *verdadeiros*, 『正統の』 *legítimos*。
- 32 ポルトガル植民地時代、＜黒人＞はポルトガルの初等教育、もしくはキリスト教会の教化を受けてポルトガル語で話し、少なくとも自分の名前が書けるようになったものについては *assimilado(s)*＜同化者＞として統計上算入されたが、その他の者は＜原住民＞として、法律上も登記の対象外とされていた。1960年以後は彼らも法律上登記対象となったが、実務上は以前と変わらない扱いであった。
- 33 原文は下記アンゴラ教育省サイト（2009年5月1日アクセス確認）。<http://www.inide.angoladigital.net/pdf/LEIdeBASES%20do%20novo%20Sistema%20de%20ensino.pdf> .
- 34 原文は下記サイト（ポルトガルクトリック大学サイト、2009年5月1日アクセス確認）。<http://www.ucp.pt/site/resources/documents/IEP/LusoForum/Constituicao%20angola.pdf> .
- 35 アンゴラ教育省下記サイトの凡例参照（2009年5月1日アクセス確認）。<http://www.inide.angoladigital.net/pdf/cronimplanta%E7%E3odos%20novos%20materiais.pdf> .
- 36 初等教育は、<http://www.inide.angoladigital.net/pdf/curriculo%20do%20Ensino%20Primario.pdf>, 中等教育第一期は、<http://www.inide.angoladigital.net/pdf/curriculo%20do%20Ensino%20secundario%201%BA%20ciclo.pdf>（2009年5月1日アクセス確認）。
- 37 CICIBA は、1983年、前ガボン大統領ボンゴによってバンツール諸語が話される国々の連帯を目指して作られた国際団体であり、汎バンツール主義の中心である。本部はガボンのリーブルビルで、現在の参加国は次の11カ国。アンゴラ、ガボン、カメルーン、コモロ諸島、コンゴ共和国（ブラザビル）、コンゴ民主共和国（キンシャサ）、サントメ＝イ＝プリンシペ、ザンビア、赤道ギニア、中央アフリカ共和国、ルワンダ。大西洋沿岸のフランス語圏の参加国が多いのが特徴。バンツール文化の影響があるブラジルを中心とした中南米諸国との連携を目指しているのも注目できる。
- 38 2008年7月12日付、放送局ラジオルアンダ Web 記事「言語学者、国民言語の研究について明らかに」<http://www.rna.ao/radioluanda/noticias.cgi?ID=21790>（2008年9月15日アクセス確認）。
- 39 2007年2月2日付、新聞 *Jornal de Angola* 記事「500人の小学一年生がウンブンドゥ語を学習」。<http://www.jornaldeangola.com/> より記事検索（2009年5月1日アクセス確認）。
- 40 <http://www.pearson.com/index.cfm?pageid=218&fid=2935>（2009年5月1日アクセス確認）。
- 41 2008年1月8日付、通信社アンゴラプレス記事「ナミベ——大臣、国民言語に対してより注意を払うことを求める」<http://www.angolapress-angop.ao/noticia.asp?ID=586785>（2008年9月15日アクセス確認）。



- 42 2008年10月21日付、新聞 *Jornal de Angola* の「国民言語による教育義務化を主張」・「言語政策の定義付けは母語にとって重要」の2記事。http://www.jornaldeangola.com/ より記事検索 (2009年5月1日アクセス確認)。
- 43 2008年3月5日付、通信社アンゴラプレス記事「言語政策に関する会議におけるアンゴラ派遣団」 http://www.portalangop.co.ao/motix/pt\_pt/noticias/lazer-ecultura/Linguista-afirma-ser-imperioso-estudo-das-linguas-nacionais,d8362c15-8fca-46dd-8707-9480e943d3ad.html (2008年9月15日アクセス確認)。

## 参考文献

- 青木一能 (2001) 『アンゴラ内戦と国際政治の力学』 芦書房。
- 小倉充夫 (2009) 『南部アフリカ社会の百年——植民地支配・冷戦・市場経済』 東京大学出版会。
- オリヴェイラ・マルケス (1981=1972) 『ポルトガル——世界の教科書＝歴史』 (三巻) ほるぷ出版。
- 梶 茂樹、砂野幸稔 [編著] (2009) 『アフリカのことばと社会——多言語状況を生きるということ』 三元社。
- カルヴェ、ルイ＝ジャン (2006=1998/2002) 『言語学と植民地主義——ことば喰い小論』 三元社。
- 砂野幸稔 (2008) 『ポストコロニアル国家と言語——フランス語公用語国セネガルの言語と社会』 三元社。
- バンシナ (1992=1984) 「赤道アフリカとアンゴラ——民族移動と最初の国家の出現」 『ユネスコ・アフリカの歴史』 同朋舎出版, 第4巻下, 797-835。
- 林 晃史 (2001) 「アフリカにおける地域機構と紛争」 『敬愛大学国際研究』 7, 1-19。
- デビッドソン他 (1988=1985) 「中・南部アフリカにおける政治とナショナリズム」 『ユネスコ・アフリカの歴史』 同朋舎出版, 第7巻下, 993-1051。
- フレイレ、ジルベルト (2005=1933) 『大邸宅と奴隷小屋——ブラジルにおける家父長制家族の形成』 (上・下) 日本経済評論社。
- 米田信子 (2002) 「多言語国家における教育と言語政策——独立ナミビアの事例から」 『現代アフリカの社会変動——ことばと社会の動態観察』 人文書院, 150-169。
- Agualusa, José Eduardo (1993) 'Tentativa de explicar Angola: a componente etno-cultural da guerra civil' in *Política Internacional*, 6(1): 73-81.
- Andrade, António Alberto de (1969) *Many Races but a Sole Nation*, Lisboa: Agência-Geral do Ultramar.
- Andrade, Mário Pinto de (1997) *As origens do nacionalismo angolano*, Lisboa: Dom Quixote.
- Assis Malaquias (2007) *Rebels and Robbers: Violence in Post-colonial Angola*, Uppsala: Nordic Africa Institute.
- Barbeitos, Arlindo (2005) *A sociedade civil: estado, cidadão, identidade em Angola*, Lisboa: Novo Imbondeiro Editores.
- Bastin, Yvonne, André Coupez & Michael Mann (1999) *Continuity and*



- Divergence in the Bantu Languages: Perspectives from a Lexicostatistic Study*, Tervuren: Musée Royal d'Afrique Centrale.
- Batibo, Herman (2005) *Language Decline and Death in Africa: Causes, Consequences, and Challenges*, Bristol: Multilingual Matters.
- Bender, Gerald J. (2004) *Angola sob o domínio português: mito e realidade*, Luanda: Editorial Nzila.
- Birmingham, David (1992) *Frontline Nationalism in Angola & Mozambique*, Trenton: Africa World Press.
- (1995) 'Language is Power: Regional Politics in Angola' in K. Hart & J. Lewis [Eds.] *Why Angola Matters*, Cambridge Univ. Press.
- (2006) *Empire in Africa: Angola and its Neighbors*, Ohio Univ. Press.
- Boxer, C.R. (1963) *Race Relations in the Portuguese Colonial Empire, 1415-1825*, Oxford: Clarendon Press, 1963.
- Brigitte, Lachartre & Christine Messiant (2009) *L'Angola postcolonial: Tome 2, Sociologie politique d'une oléocratie*, Paris: Karthala.
- Cahen, Michel (1998) *Des protestantismes en "lusophonie catholique"*, Paris: Karthala.
- Castelo, Cláudia (1998) "O modo português de estar no mundo": o lusotropicalismo e a ideologia colonial portuguesa (1936-1961), Porto: Afrontamento.
- Chabal, Patrick & David Birmingham (2002) *A history of postcolonial Lusophone Africa*, Indiana Univ. Press.
- Chabal, Patrick & Nuno Vidal (2007) *Angola: the Weight of History*, Columbia Univ. Press.
- Clarence-Smith, W. G. (1985) *The Third Portuguese Empire, 1825-1975: A Study in Economic Imperialism*, Manchester Univ. Press.
- (2008=1979) *Slaves, Peasants and Capitalists in Southern Angola 1840-1926*, Cambridge Univ. Press.
- Couto, Gustavo (1927) 'As línguas vernáculas e o funcionalismo colonial' in *Boletim da Agência Geral das Colônias*, 3/26, 24-40.
- Cuesta, Pilar Vasquez (1990) 'O ensino do português enquanto língua segunda em Angola', in *Angolê: Artes, Letras, Ideias*, 1, 15-18.
- Cunha, Luis (2001) *A nação nas malhas da sua identidade: o Estado Novo e a construção da identidade nacional*, Porto: Afrontamento.
- Diniz, José de Oliveira Ferreira (1917) *Populações indígenas de Angola*, Coimbra: Imprensa de Univ.
- Divisão de Etnologia e Etnografia [Ed.] (1970) *Carta étnica de Angola (esboço)*, Luanda: Instituto de Investigação Científica de Angola.
- Doke, Clement (1954) *The Southern Bantu Languages*, Oxford Univ. Press.
- Edwards, Adrian C. (1962) *The Ovimbundu under Two Sovereignties*, Oxford Univ. Press.

- Ferro, Marc (1996) *História das colonizações: das conquistas às independências -sécs. XIII-XX*, Lisboa: Editorial Estampa.
- Forrest, Joshua (2004) *Subnationalism in Africa: Ethnicity, Alliances, and Politics*, Lynne Rienner Publishers.
- Frey, R. Silvia & Betty Wood (2003) 'The Americas: The Survival of African Religions' in Gad J. Heuman, James Walvin [Eds.] *The Slavery Reader*, Routledge, 384-404.
- Freyre, Gilberto (1961) *O luso e o trópico*, Lisboa: Comissão Executiva das Comemorações do Quinto Centenário da Morte do Infante D. Henrique.
- Gallo, Donato (1988) *O saber português: antropologia e colonialismo*, Lisboa: Heptágona.
- Gonçalves, António Custódio (2003) *Tradição e modernidade na (re)construção de Angola*, Porto: Afrontamento.
- Guthrie, Malcolm (1948) *The Classification of the Bantu Languages*, Oxford Univ. Press.
- (1967-71) *Comparative Bantu*, 4 vols. London: Gregg Press.
- Henderson, Lawrence W. (1979) *Angola: Five Centuries of Conflict*, Cornell Univ. Press.
- Holden, Clare (2002) 'Bantu Language Trees Reflect the Spread of Farming across Sub-Saharan Africa: a Maximum Parsimony Analysis' in *Proceedings of the Royal Society of London, Series B* 269, 793-799.
- Hurth, K. (1995) 'Language policy in Angola: Results and Problems.' in *Logos-Language Ecology in Africa*, 14, 76-89.
- Jorge, Manuel (1998) *Para Compreender Angola*, Lisboa: Publicações Dom Quixote.
- Maho, Jouni (2001) 'The Bantu Area: (Towards Clean up) a Mess', in *Africa & Asia*, Dept. of Oriental & African Languages, Göteborg Univ., 1, 40-49.
- Mai, Palmberg (1999) *National Identity and Democracy in Africa*, Uppsala: Nordic Africa Institute.
- Maison des pays ibériques [Eds.] (1997) *Lusotropicalisme: idéologies coloniales et identités nationales dans les mondes lusophones*, Paris: Karthala Editions.
- Manuel, Paul Christopher, Lawrence Christopher Reardon & Clyde Wilcox (2006) *The Catholic Church and the Nation-State: Comparative Perspectives*, Georgetown Univ. Press.
- Mark, Peter (2002) *"Portuguese" Style and Luso-African Identity: Precolonial Senegambia, Sixteenth-nineteenth Centuries*, Indiana Univ. Press.
- Martins, Moisés de Lemos (2006) 'Lusofonia e Luso-tropicalismo: equívocos e possibilidades de dois conceitos hiper-identitários', in *Visages d'Amérique Latine*, 3, 89-96.
- Messiant, Christine, Brigitte Lachartre & Michel Cahen (2008) *L'Angola postcolonial: Tome 1, Guerre et paix sans démocratisation*, Paris: Karthala.

- Menezes, Solival (2000) *Mamma Angola: sociedade e economia de um país nascente*, São Paulo: EdUSP.
- Miller, Joseph Calder (1996) *Way of Death: Merchant Capitalism and the Angolan Slave Trade, 1730-1830*, Univ. of Wisconsin Press.
- Möhlig, Wilhelm J.G. (1981) 'Stratification in the history of the Bantu languages' in *Sprache und Geschichte in Afrika* 3, 251-316.
- (2000) The language history of Herero as a Source of Ethnohistorical Interpretations, in Michael Bollig & Jan-Bart Gewald [Eds.] *People, Cattle and Land*, Köln: Köppe, 119-146.
- Monteiro, J. A.Pereira (1961) 'A acção colonizadora portuguesa: problemática sócio-política de Angola-aspectos fundamentais' in *Estudos Ultramarinos* 1961/2, 17-72.
- Moorman, Marissa J. (2008) *Intonations: A Social History of Music and Nation in Luanda, Angola, from 1945 to Recent Times*, Ohio Univ. Press.
- Neves, A. F. Santos (1975) *Para um ecumenismo omnitotidimensional em Angola*, Lisboa: Editorial Colóquios.
- Okuma, Thomas (1962) *Angola in Ferment: The Background and Prospects of Angolan Nationalism*, Boston: Beacon Press.
- Roque, Fátima Moura (1997) *Construir o futuro em Angola*, Oeiras: Celta Editores.
- Rosa, V. Pereira da & Castillo, S. [Eds.] (1998) *Pós-colonialismo e identidade*. Porto: Univ. Fernando Pessoa.
- Roy-Campbell, Zaline Makini (1999) *Empowerment through Language-The African Experience: Tanzania and Beyond*, Trenton: Africa World Press.
- Senghor, Leopold S. (1975) *Lusitanidade e negritude*, Lisboa: Academia das Ciências.
- Venâncio, J.C. (1996) *Colonialismo, antropologia e lusofonias: repensando a presença portuguesa nos trópicos*, Lisboa: Vega.
- Vansina, Jan (1990) *Paths in the Rainforests: Toward a History of Political Tradition in Equatorial Africa*, London: James Currey.
- (2001) 'Portuguese vs Kimbundu: Language Use in the Colony of Angola (1575- c.1845)', in *Bull. Séanc. Acad. R. Sci. Outre-Mer Mede. Zitt. K. Acad. Overzeese Wet*, 47, 267-281.
- Vera Cruz, Elizabeth Ceita (2005) *O estatuto do indigenato-Angola: a legalização da discriminação portuguesa*, Lisboa: Novo Imbondeiro Editores.

#### 参考ウェブサイト

- アフリカ言語アカデミー (ACALAN) サイト <http://www.acalan.org/>
- 国際パンツァー文明センター (CICIBA) サイト <http://www.ciciba.org/>